

広報

2016

5

なか

No.136

発行日 平成28年5月11日

発行 那珂市

編集 秘書広聴課広報グループ

〒311-0192

茨城県那珂市福田1819-5

E-mail hisho-k@city.naka.lg.jp

U R L <http://www.city.naka.lg.jp>

目次 Contents

水鳥③ … 2

那珂市消費生活センターです … 6

那珂ふるさと大使通信 … 7

消防本部NEWS … 8

那珂市内放射線量測定状況 … 11

まちの話題 … 12

Information … 14

さわやかさん ほか … 18



水鳥

23

「端午の節句」

歴史民俗資料館から始まった「ひな人形展」に、市民の皆さんによる「つるしびな」が加わって華やかとなり、「那珂のひなまつり」に発展してきました。加えて歴史民俗資料館は「端午の節句展」も開催、これもまた「端午の節句のつるしびな」が加わって「那珂の節句展」に発展しつつあります。ここでは、端午の節句の意味するところと親子の在り方や家族愛の話題をいくつか紹介してみます。



▲那珂市戸崎にて

端午の節句を代表するものといえば、青空に薫風を浴びながら泳ぐ勇壮な鯉のぼりでしよう。江戸時代の中ごろに裕福な家庭から始まった習慣です。武家の家では奥座敷に先祖伝来の鎧や兜を飾り、外には家紋を付けた「幟」を立てて男児の健康・出世を願い、家訓を伝えたものでした。厄払いの菖蒲も「尚武」に結ぶとして飾りや湯に用いられてきました。財を得た庶民の中には武士を超える印として豪華なものを飾る傾向が出てきました。

昭和の時代までは、ほとんど

の家が自分の持ち山の杉の木を切り出して棹を作り、親類などからも贈られた鯉のぼりや吹き流しを何本も結びつけて屋敷一杯に泳がせたものでした。

文部省唱歌として

「いらかの波と雲の波

重なる波の中空を

橘かおる朝風に

高く泳ぐやこのぼり」

と歌われた風景は実に懐かしいものでしたが、住宅事情などから現在は内飾りに変わってきています。それらの内飾りも子どもの成長とともにだんだんと飾られることがなくなり歴史民



▲歴史民俗資料館「端午の節句展」

俗資料館で代わりに展示されるようになってきました（現在は節句飾りの受け付けはしていません）。



父の訓え

1 桜井の子別れ

(楠木正成と正行)

歴史民俗資料館の玄関前には大きなクスノキがそびえており、5月には若葉が日の光を浴びて輝きを見せます。



▲民俗資料館前のクスノキ

延元元年（1336）5月、南朝方に就いた楠木正成は、北朝方の足利尊氏と湊川（兵庫県）の戦いに臨みますが、途中の桜井（大阪府）で父と共に戦おうとすがる長男の正行に、「生きて、南朝方（後醍醐天皇）のために戦え」と諭

し郷里へ返します。別れた正行は、その後父の遺訓を守り、南朝方に立って奮闘しますが正平3年（1348）大坂四条畷の戦いで命を落とします（25歳）。



「楠公父子桜井の子別れ」
(思文閣図録『和と美』より)

同じく南朝方として瓜連城にこもった楠木正成の一族である楠木正家は、建武3年（1336）2月から北朝方の佐竹貞義・義篤軍と久慈川や山田川の河原などで合戦しますが、12月に敗れて奥州へ逃れます。瓜連城はその後間もなく廃城となり、そこに常福寺が移り佐竹氏の保護するところとなります。

その後、正家は正行と共に四条畷において戦い、戦死しました。父子の在り方を示す歴史上の出来事です。

2 水戸藩主父子

① 徳川頼房と光圀

徳川家康は、関ヶ原の合戦後に佐竹義宣を秋田へ移します。家康からすれば、江戸に近い常陸の位置から考えても当然の措置であったと思われます。その後五男の信吉が封ぜられ、市内菅谷に「御殿」が設けられましたが、住まいすることなく若くして病死してしまいます。家康は、名門「武田姓」の復活・存続を子に託したのでしたが…。



▲瓜連城跡の空堀

その後十一男の頼房を送り水戸徳川家の初代に据えました。頼房は、那珂市との関連では小場江堰構築などに尽力しましたが、寛文元年（1661）7月に59歳で亡くなります。

頼房は、病の床にあつて世継ぎの子光圀に厳命します。「これまよく親孝行を尽くしてくれた。自分が死ねば、世俗に倣って殉死しようとする者が出るであろうが、決して許してはならない。自分頼房に対するその志をもつてそち（光圀）に仕えさせよ。もし聞かぬものがあれば、君臣の関係を絶て！」と。これ実に幕府の殉死禁令より2年前のことでした。光圀は、太田の瑞龍山に墓地を設けて亡父を埋葬し、その後伯父武田信吉の霊を祀るために水戸と太田の間に好い土地を求め、額田向山に浄鑑院常福寺を建立しました（浄鑑院は武田信吉の法号。那珂第二中学校裏手の畑の中と山林内に歴代住職の数人の墓碑が残っています）。



▲額田向山 浄鑑院常福寺跡

②三代藩主綱條

徳川光圀は、古来からの長子相続の筋を貫きました。長兄頼重を差し置いて三男の自分が水戸家を継いだことに悩み、三代目には自分の子頼常ではなく高松藩主となっていた頼重の子綱條を据えしました。綱條も養父光圀に孝行を尽くし、光圀亡き後の宝永2年（1705）、遺言であった「静神社への三十六歌仙絵図奉納」（茨城県指定文化財）を果たしています。



綱條奉納の「三十六歌仙」一部

また綱條は、高松に眠る母親（皓月院）の身近にいて供養するために石仏像を造り、浄鑑院常福寺境内に安置しました。しかし、常福寺が幕末の天狗諸生の争乱で焼失してしまったため、石仏像は末寺であった額田南郷の引接寺境内に移され、今日も大切に祀り供養されています。

さらに光圀は、この綱條に重大な遺訓を与えています。「国を治めるには必ず仁の心によれ。禍は閨門（家庭や男女関係）から始まる人が多い、慎んで五倫（道徳）を乱すことのないように。友人には礼儀を尽くせ。常に忠義心を磨け。古くから云われている、たとえ主君に不行き届きがあっても、臣下は臣下の立場を守るように」と。また「我が主君は天子（天皇）なり。今の將軍は我が宗室（親類筋の本来）なり。ゆめゆめ考え違いすることのないように」と（將來、朝廷と幕府とが対立することもある来ようかと想定しています）。



▲引接寺境内の「石仏像皓月院」

③額田鈴木家御殿と

七代藩主徳川治紀

額田南郷の鈴木家は、二代藩主光圀の養女万姫が嫁入りした富裕な家として知られています。水戸藩の歴代藩主は、太田の水戸徳川家墓所瑞龍山や光圀の隠居所である西山荘へ向かう途中、休憩や食事のために鈴木家に立ち寄っています。あるとき、藩主治紀を迎えるにあたり、当主の市十郎は書院の床の間に光圀の筆物を掛け置く心遣いをしました。治紀は、置かれた机を、床を背にした南面から西向きに変えて着座しました。崇敬する光圀を背にして座することはできないとの心からでした。



▲鈴木家の書院

④九代藩主徳川斉昭と慶喜

額田北郷の寺門治平宅での出来事。明治26年（1893）、斉昭夫人登美宮の葬儀が行われました。夫人の遺骸を瑞龍山墓地へ埋葬するためにやってきた子息の元將軍徳川慶喜は、帰路治平宅に1泊しました。治平は、先ずご休憩をと座敷に通し安座を勧めますが、慶喜は正座のまま時を過ごします。もしやと治平は、床の間の烈公筆の掛け物を別な物に替えてみました。慶喜はやつと安座してくつろぎました。父親の前では安座など許されないとの気持ちでありました。

この4題、先祖や父（両親）への畏敬の念を示すエピソードです。



寺門家所蔵の「斉昭筆掛物」

家族愛

この文章は、数年前に毎日新聞「女の気持ち」欄に載った小池妙子さん（東京都渋谷区）が投稿されたものです。家族とは何か、親は子どもに何を伝えるかなどを教えてください。貴重な一例です。

母を在宅介護することができ幸せだった。7年間に何の悔いもない。恩返しをさせてもらって感謝している。野辺の送りに子どもたちは「浜辺の唄」を歌った。西海の海辺で育った母のために。その日の母の顔が、これまでで一番美しかった。

夏の暑い日、突然いなくなつた母、介護はその日から始まつた。失禁を繰り返す母に、ある日私はおむつをはかせた。母の目から涙がぼろぼろとこぼれた。私は胸をえぐられる思いがして、布のパンツに替えた。家中をフローリングにしたが、お湯とエタノールで日に何回も床をふいた。母が寝たきりになるまで続いた。

二女が5年生の時、学校から帰ると母が廊下に立っていた。大便

をもらし、廊下も部屋も汚れていた。私は外出中、二女は母をお風呂に入れ、体を洗った。私がいつもするように、お湯とエタノールで廊下をふいた。三人の子どもたちは時々、車イスで母を散歩に連れ出した。

最期の時、子どもたちは病室で童謡を一時間歌い続けた。歌声を聴きながら潮が引くように母は逝つた。当直の看護婦が「こんな幸せな亡くなり方をしたお婆ちゃん、見たことがない。いい当直をさせてもらった。」と話してくれた。

今年の春は、あつという間だった。母が逝つた3月16日、棺を乗せた車窓から見上げると、夜桜が光っていた。

日本の伝統的民俗行事には、さまざまな意味合いが込められています。良き伝統を残しつつ、明るく活力のある社会を作り上げていきたいものです。



「ちやぶ台を囲む家族」
〔茨城新聞社「写真記録茨城20世紀」より〕

▼「戦後70年 戦争の記憶」 発行のお知らせ

那珂市史編さん委員会では、戦後70年を迎えた節目の年に、戦争の記憶を時代につなげ、今一度平和の大切さを再認識する機会となればと発行しました。市内に残る貴重な写真や、戦争体験談などを多く採録し、大変読みやすい内容となっています。

◆内容 戦争の回顧・戦時下の国民生活・戦時下の教育・満蒙開拓・敗戦と占領政策・戦争体験・史料編

◆形状 A4版198ページ

◆価格 1000円（税込）
※歴史民俗資料館にて販売



問い合わせ

歴史民俗資料館
☎297・0080